

## シカゴ学派都市社会学のアジア「親密圏」分析への応用可能性

— グローバル化の原初理論としてのシカゴ学派社会学 —

西川 知亨

(京都大学大学院文学研究科グローバル COE 研究員)

2010 年 1 月



京都大学グローバル COE

「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科

Email: [intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp](mailto:intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp) URL: <http://www.gcoe-intimacy.jp/>



# シカゴ学派都市社会学のアジア「親密圏」分析への応用可能性

—グローバル化の原初理論としてのシカゴ学派社会学—

西川 知亨

- 1 はじめに—グローバル化の原初理論としてのシカゴ学派社会学
- 2 20世紀初頭のシカゴとグローバル化？—自己・コミュニケーション・国家
- 3 自己の流動性——脱近代家族？
  - 3.1 自己の流動性とは
  - 3.2 アイデンティティ
  - 3.3 アメリカ化
  - 3.4 居場所
  - 3.5 ジェンダー化された「親密圏」
- 4 コミュニケーションのグローバル化——中間集団モデルの限界？
  - 4.1 中間集団モデルの限界とコミュニケーションの流動化
  - 4.2 異文化理解
  - 4.3 英語・言語
  - 4.4 消費文化
  - 4.5 メディア
- 5 グローバル化と国家の変容——国境の脱構築？
  - 5.1 グローバル化と国境？
  - 5.2 移民
  - 5.3 経済格差
  - 5.4 福祉国家
- 6 まとめ——シカゴ・モデルの条件と応用可能性

## 1 はじめに——グローバル化の原初理論としてのシカゴ学派社会学

GCOE プロジェクト「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」がとらえる、「グローバル化」と「親密圏と公共圏の同時変容」のイメージ図によれば、従来の近代社会モデルにおいては、社会は近代家族・市民社会・国家の三層構造をなしていた。それが、グローバル化にともない、21世紀社会の現実としては、人と社会の流動化が進んでいるのだという<sup>1</sup>。また、理念としては、「伝統的社会から高度近代とグローバル化時代への「圧縮された」変化こそ、本来多様な私的領域をもつアジア諸社会に、多くの共通する現象、すなわち Asianization とでも呼ぶべき共通の実態を現出させているのであり、その解明にはアジアの現実からの理論化が求められて」（GCOE HP より）いるのだという。とりわけ、アジアは、欧米のモデルにおける「近代」と呼ばれる時代が圧縮されており、そのため、新しい研究分野、「アジアの親密圏と公共圏」の開拓と理論化へ向けて、欧米モデルの社会変動論の転換が必要であるのだという。

<sup>1</sup> GCOE HP 参照 <http://www.socio.kyoto-u.ac.jp/intimacy-old/>（2008年12月24日閲覧）

このような理念で研究を進めていく上で、アジア的と言われる圧縮された近代の現象は、他の地域を対象とした社会理論を無視して、「アジア」から内在的にしか分析できないというわけではない。依拠するにせよ、乗り越えるにせよ、GCOE が構築を目指している、公共圏と親密圏の再編成に関する理論と、似たような理論・参照にたえうる理論を、練成して示す必要性もあるのではないかとも思われる<sup>2</sup>。アジア親密圏の分析に向けて、必要なことは、あらゆる社会の親密性と公共性に関する議論を参照しながら、アジア的な理論構築を目指すことであろう。

アジア的親密圏のなかでも、「圧縮された近代」や「グローバリゼーション」の側面を強調するならば、あらゆる社会理論のなかでも、シカゴ学派社会学は、ひとつの有力な参考となる方法を提供する。5年前にすでに報告者は、「親密圏」という言葉を、シカゴ学派に関する論考において用いたことがあったが、親密圏分析においても、シカゴ学派社会学は豊穡な視点を提供する（西川 2004: 141）。

本報告では、シカゴ学派都市社会学のアジア「親密圏」分析への応用可能性の追究に向けて、シカゴ学派社会学をグローバル化の原初理論としてとらえなおす。シカゴ学派社会学が、現在のアジア的状况にも似て、「近代化」のみならず「高度近代化」の過程も進行する流動的な状況を描いていたことを示すことで、現代の日本などのアジア地域分析への応用可能性へと志向し、アジア親密圏の豊饒化のプロジェクトへの理論的貢献を目指したい。この作業は、シカゴ学派社会学からグローバル化理論の新たな視点を読みとるための予備的研究として位置づけられる。このような目的からすると、GCOE がとらえる「欧米モデル」の表象に、シカゴ学派が必ずしも包摂されない有用な視点を提供することを示す必要がある。実際に本報告で示すのは、初期シカゴ学派の社会学者が前提とした 20 世紀初頭のシカゴにおいて、「グローバル化」と「親密圏と公共圏の同時変容」が進んでいたことである。GCOE のプロジェクトがとらえる、「グローバル化」と「親密圏と公共圏の同時変容」とは、近代家族・市民社会・国家の三層構造が流動化しているのだということであるが、この流動的な過程が、20 世紀初頭のシカゴにおいて進んでいたことを示す。そのためには、従来の近代化論のみに終始とするシカゴ学派のイメージを、文献の読解によって、部分的に脱構築する必要も出てこよう。

## 2 20 世紀初頭のシカゴとグローバル化？——自己・コミュニケーション・国家

本報告の立場としては、シカゴ学派の流動理論においては、すでに激動の 20 世紀初頭のシカゴにおいて、部分的にせよ、近代化とグローバル化が同時に進行していたと、とらえるものである。たしかに、従来とらえられていたシカゴ学派のモデルでは、高度近代化までには到達しない／省みられない、単なる近代化・都市化の理論としてしかとらえられていない。ともすると、1960・70 年代のシンボリック相互作用論の振興の表象そのままに、質的方法のみに終始する学派であるととらえられることもまだまだ多い。しかし、本報告で示される、実際のシカゴ・モデルは、やや異なる。本報告におけるシカゴ・

---

<sup>2</sup> GCOE の理論研究班班長の理念のなかでも、「これまでさまざまな立場から親密性と公共性をめぐって展開されてきた議論の収集・整理が有効な手がかりになる」（GCOE HP より）と述べられている。

モデルでは、都市化と同時に、もともと遠く離れていた個人が、出会い、影響しあうという意味で、グローバル化の原初的条件を提供するととらえる。また、方法論のひとつとして、シカゴ・モデルを採用することで、すでに別で論じたような、社会調査方法論上の、質・量の絡み合い（entanglement）による把握が可能になる（西川 2008b）。

シカゴ学派の文献とひと口で言っても、種々の領域を網羅したさまざまなテキストがある。本報告では、広く初期シカゴ学派の文献を渉猟して示してみせるが、わけでも、E・W・バージェスとE・F・フレイジアのテキストを主として使用したい。その理由として、3つを示しておきたい。第1に、シカゴ学派人間生態学の総合的社会認識が表れているという点である。流動化する社会の分析には、スナップショットビューにとどまらない総合的把握が必要となるが、この2人の視点は、シカゴ社会学者のなかでも流動化する社会の把握に適している<sup>3</sup>（西川 2008b）。第2に、社会学や家族論における「親密圏」の議論と文献を渉猟していくと、ひとつの起源として、バージェスの（友愛的家族論等で内外のテキストにもよく登場する）家族社会学の議論に行きつくという点である。とくに後期バージェスの老年社会学の論議は、わが国ではあまり知られていないが、社会変動と高齢化の関係について論じた興味深い視点を提供する。第3に、2人は、親密圏のみならず、「公共圏」をコミュニティという形で分析しているということである。現在のアジア社会では、社会福祉の供給元は、家族などの「親密圏」に加え、市場、国家などにかかわる「公共圏」もある。福祉多元主義や福祉ミックスと呼ばれる福祉の時代においては、貧困状況にある人びとは、親密圏を公共圏に求めたり、逆に公共圏を親密圏に変容させたりする。とくにバージェスのテキストを読み解いていくと、彼は後期において、公共圏と親密圏からの福祉供給の可能性について模索していたように思われるのである。

次節からは、流動化する三層構造、近代家族・市民社会・国家の各項目にそって、その流動性について論じることで、シカゴ学派が近代化のみならず、高度近代化にも（部分的・条件つきで）志向していたことを示していきたい。もちろん、グローバル化、あるいは高度近代化とひと口で言っても、いくつもの特質が指摘できるが、本報告では、本 GCOE プロジェクト「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」が問題化する、近代家族・市民社会・国家にかかわるグローバル化のキーワードに絞り込んで考察する。第3節では、三層構造の1つ目、近代家族の流動性、とりわけ自己の流動性についてシカゴ学派のテキストからすくい出していきたい。具体的には、現代のグローバル化時代のキーワード群となっている、アイデンティティ、アメリカ化、居場所、ジェンダー化された「親密圏」、について論じる。第4節では、三層構造のうちの2つ目、市民社会の流動性、とりわけメディアを含んだコミュニケーションや相互作用の流動化について論じる。ここでは、公衆・市民社会論のみならず大衆社会論にお

---

<sup>3</sup> 報告者は、2009年2月、カリフォルニア大学アーバイン校（UCI）社会生態学部（school of social ecology）に出張し、人間生態学の実践および逸脱論などについての調査をおこなった。同学部では、ギルバート・ゲイス（Gilbert Geis）名誉教授、ヘンリー・N・ポンテル（Henry N. Pontell）教授のお世話になった。ホワイトカラー犯罪研究の大家であるゲイス教授からは、直接の会話・私信にて、報告者らの質問に対して丁寧な回答をいただいた。ポンテル教授は、アジア諸国にも造詣が深く、日本のホワイトカラー犯罪についての論文を執筆している他、香港や日本などで講演活動を精力的におこなっておられる。氏からは、文献・資料の提供（郵送）などでもお世話になった。また同時期の、カリフォルニア大学サンディエゴ校（UCSD）出張の折においても、各関係研究者からは多大な便宜を受けた。

ける中間集団モデルの限界が浮かび上がってくる。具体的には、これらもグローバル化時代のキーワード群となっている、異文化理解、英語・言語・翻訳、消費文化、メディアについて論じる。第5節では、三層構造の3つ目、国家の流動性、とりわけグローバル化と国家の変容を論じることで、初期シカゴ学派の時代においてすでに、国境概念が脱構築される可能性を有していたことが示される。具体的には、やはりグローバル化時代のキーワード群となっている、移民、経済格差、福祉国家について論じる。本報告の末尾では、アジア親密圏の分析に向けた、シカゴ・モデルの条件と、その敷衍可能性について示される。

これらグローバル化時代をあらわすキーワード群を手がかりにして (cf. 西川・大空・姫岡・夏編 2003)、シカゴ学派がこれらをいかに扱っていたかを考察することで、シカゴ学派に見られるグローバル化事象について浮かび上がらせる。それではまず、三層構造の1つ目、近代家族の流動性、とりわけ自己の流動性についてシカゴ学派のテキストからすくい出していきたい。

### 3 自己の流動性——脱近代家族？

#### 3.1 自己の流動性とは

グローバル化の理論家が強調するのは、自己というものは、流動的なものであるという点である。近代市民社会論の文脈では、自己というものは、近代的自我の概念で表されるように、内面に統一体を有していて、一個の核を形成している。その核が、その人のアイデンティティを形成しているにとらえられていた。しかし、20世紀後半以降の、現代社会の理論家が強調するのは、自己というものは、より過程的・流動的だということである。

だが、自己の過程性、流動性の側面については、何もここ四半世紀の時代において初めて指摘されたというわけではない。すでに、20世紀初頭の初期シカゴ学派をリードしたロバート・E・パークが、ポストモダンの理論家の自己論を先取りするかのように論じているのである。パークは、次のように述べている。

経験的な自己は、常に変化し続けており、けっして自分の中で一貫しているというわけではない。これは、個人を基本的な単位として見ることはできないということの意味している。このような立場からも、また社会学が探求してきた社会関係のシステムという側面から見ても、個人は永続的に変わらないものという性質があるわけではないのである。(Park 1972: 29; May 2001: 150=2005: 220)

こうしたグローバル化時代の自己概念に似た自己の様相については、指導者のパークの考え方を踏襲するかのように、すでにシカゴ・モノグラフのなかで描かれている。

### 3.2 アイデンティティ

たとえば、アイデンティティに関して言えば、シカゴ・モノグラフでしばしば登場する、人種上のマージナルマンたちである。マージナルマンについては、自己の不安定性が強調されることもあるが、しかし、ここで取り上げる例は、積極的に逸脱に関与しようとするムラートと呼ばれる混血の「黒人」である（西川 2004: 138; Frazier 1932: 176-7）。

フレイジアは、そのケースを、社会事業所も裁判所もあまり注目しなかった一つの例外的な事件だとする。そのケースのある若い男は、教養があり、文化的背景を持った家族の出身であった。さらに大学の友愛会やその他黒人コミュニティの組織で高い地位を得ていた。彼は突然、子ども一人と妊娠中の妻を残して姿を消してしまったのである。そのコミュニティはショックを受けた。そして誰も彼が遺棄をはたらいたのだとは信じたがらなかった。彼が消え去ったのは悪意あつてのことかそれとも単なる事故か、綿密な調査が行われた。だが、彼は遺棄に向けてかなりの準備をしていたということでその調査は幕を閉じた。同時に彼は白人として「パス」していた職場だけでなく白人集団ともかなりつながりを持っていたことが分かった。彼は肌の色が白かったために、黒人の世界と白人の世界という二つの違った世界を自由に行き来することができた。そのおかげでどちらの道徳的拘束も受けることなく、一方から一方へと好きなように逃げることもできたのである。彼が黒人集団と持っていた関係は、放浪人もしくはストレンジャーの関係そのものであった。彼は、慣習や敬虔さ、そして慣例などによる拘束を受けていなかったのだと言える。

黒人と白人の世界を行き来するムラートは、固定した属性というよりも、社会関係の中で、自己の流動性を活用しているかのようである。

### 3.3 アメリカ化

グローバル化はアメリカ化と同じものとしてとらえられることもあれば、両者を厳密に区別する考え方も現在は主流となっている（cf. 西川・大空・姫岡・夏編 2003: 6-8）。グローバル化は、近代化に比べて欧米社会の価値観が反映されない中立的な概念であるように思われるからだ。

もし、アメリカ化が、グローバル化の過程と不可分に結びついているとすれば、そのインパクトの端緒は、部分的に 20 世紀初頭のシカゴに認められる。

周知のとおり、パークのエスニック・サイクル論は、さまざまな論議を呼び起こしてきた。相互作用の形式は、競争、闘争、応化、同化の過程を経ていく。

フレイジアは、師のパークが関心を寄せながらも経験的調査をおこなうことのなかった黒人の家族生活の研究をおこなった<sup>4</sup>。その際、先述したように、フレイジアはパークのエスニック・サイクル、すなわち、競争・闘争・応化・同化の考えを導入している。南部の黒人たちが都市へ移住し、都市で生活し

---

<sup>4</sup> 本箇所に加え、本報告の 3.4、4.2、5.2 など、必要に応じて、フレイジアの文献を紹介している拙稿の（中野・西川 2002・2003）を引用・参照。またその他、本報告においては、これまでシカゴ学派に関する研究成果として発表してきた、西川（2002, 2003a, 2003b, 2003c, 2004, 2007a, 2007b, 2008a, 2008b）などもあわせて参照。フレイジアの文献のなかでも、本報告で参照している文献は、Frazier(1931, 1932)に加え、Frazier(1937, 1939, 1963, 1965, 1968)などである。

ていくなかで適応していく様子を、このエスニック・サイクルを下敷きにして描こうとしている。たしかにフレイジアも言うように、都市における競争や闘争は、不可避のものであった (Frazier 1932: 252)。

初期シカゴ学派の黒人社会学史においては、エスニック・オーダーをカーストとの関連でとらえるパークの考え方について論争がある。フレイジアは「黒人と白人の職業上の差別が取り払われるにつれ、両者を分け隔てるカーストは破れ去られ、結局は黒人もアメリカ的生活の主流へと同化していくだろう」と考えていたのだと指摘するのは、アメリカ家族研究の歴史について論じているハワードである (Howard 1981=1982: 165)。たしかにフレイジアは、本報告における 4.2 で見るように、白人の世界に同化していた例として、白人の機械工の労働者たちと共に働いていた男性 (父親) を挙げている (Frazier 1932: 240-2)。フレイジアによれば、この男性の家族は、白人の産業集団の理想、規律、伝統を引き継いでおり、それにほとんど同化していたのだという。ただし、初期シカゴ学派の人種研究をおこなっていた S・パーソンズも指摘していたように、フレイジアはなかなか「社会的同化」されない、マージナルな黒人の姿も描き出している (Persons, S. 1987: 106)。たとえば、北部では経済的な理由から白人として生活していて、南部では有色人種の仲間とかかわりをもっていたという男性がいた (Frazier 1932: 83-4)。また、突然、遺棄をはたらいた教養のある男性もいた。自分の肌の色が白かったことを利用して、有色人種ながら黒人の世界と白人の世界の両方を行き来していたという例の男性については、前節でも見た (Frazier 1932: 176-7)。

さらにフレイジアは『シカゴの黒人家族』の結論として、黒人が市民化のプロセスのなかで生活を組織化していく上では、共同体的生活への「参加」が重要である、と述べている (Frazier 1932: 252)。この結論は、パークとバージェスの次の一節を思い起こさせる。グリーン・バイブルの中で、パークとバージェスは、カーネギー社 (Carnegie Corporation) の「アメリカニゼーションの方法の研究 (Study of Methods of Americanization)」を引用しつつ、次のように言っていた (cf. 吉田・寺岡 1997: 112)。

アメリカニゼーションは「彼が居住する地域社会の生活への移民の参加」と定義される。この観点から参加は同化の手段でありゴールなのだ。あらゆる生活領域におけるアメリカンライフへの移民の参加は、その移民にとって他の領域への準備となるものである。移民と異邦人が一番必要としているものは、参加への機会なのである。(Park & Burgess 1921: 739)

すでに指摘されているように、これらのことはパークやバージェス、そしてフレイジアらの用いた「同化」の概念には再考の余地があることを示している。S・パーソンズの言うような「社会的同化」、「文化的同化」の概念と、「参加」の概念の関係を検討する必要性を有している。

では、フレイジアは、どのように「同化」をとらえていたか。パークと同様、それは参加概念と不可分の関係にある。フレイジアによれば、黒人家族生活で起こっている広範な解体は、黒人集団の市民化のプロセス (civilization process) の一側面であると考えて間違いないだろうという (Frazier 1932: 252)。それは単なる病理的な現象ではない。南部の田舎のコミュニティの孤立した農民集団で見られる家族関



係の安定性は、シカゴの黒人コミュニティにおける家族関係の安定性とは異なっていた。都市で黒人はより複雑な世界に住むということ学んだのである。黒人がコミュニケーションと移動の頻度を増加させ、より大きな世界との接触を行うようになったことの自然な結果として解体は引き起こされた。解体をどれくらい食い止められるかは、社会的伝統をどれくらい蓄積していたかに依っていた。そのような伝統の蓄積は、生活を再組織化する上での基盤となったのである。そのような伝統の蓄積があれば、たとえ何らかの損失があっても、その再組織化のプロセスの中で埋め合わせがなされたのである。競争が過酷で、家族生活が消えて無くなりそうな傾向にある地域を抱える北部の大都市では、その人口の一部は絶えるであろうと予想された。比較的高い地位を得ることができた黒人にとっても、失うものは少なからずあった。これは黒人が市民化のプロセスを経るなかで払われなければならない代償であるかのようにも思われた。だが、そのようなプロセスの中で生き残れるかどうかは、数の論理だけでなく人々がうまく共同体的生活に参加できるかどうかによっても左右された。くり返せば、競争のプロセスを人の手で歯止めをかけることができないとなれば、求められたのは人々の共同体的生活への参加を促進することだったのである。フレイジアの文献におけるシカゴの黒人のケースに見られるような、人々の参加を促進することで、黒人に共通の伝統とねらい、そして目的となるような広い考えをもたらすことができるであろうとフレイジアは結論付けるのである (Frazier 1932: 252)。

アメリカ的生活様式の植民地化は、20世紀を総じて、たしかに各地で進んできたともいえるが、ここにはその始まりを見ることができよう。

ただし、ここで重要な留意点がある。ここでいうアメリカ化は、現在のグローバル化時代においてよく指摘されるアメリカ化と、果たして同じような過程をあらわしているのだろうか。もちろん、両者は、人びとの社会生活に、アメリカ流の様式が浸透していく過程であるという意味では、共通している。だが、初期シカゴ学派の社会学者が論じるアメリカ化とは、しばしば同化と等価視される論争的な、移民の適応過程をあらわす。だが、グローバル化時代のアメリカ化とは、経済・文化などの条件・規準・基準などにおけるグローバル・スタンダード化を指すことが多い。グローバル化は、アメリカをはじめとした欧米社会の価値観から中立であるという言説も力を持っている。グローバル化とアメリカ化を厳密に区別する立場に留意しながら、両者の過程について考察する必要があるだろう。

### 3.4 居場所

「居場所 (self positioning)」は、所属の多数性と流動性を特徴とする、グローバル化時代の社会的帰属のひとつのキーワード概念として、しばしばとらえられる。近代社会の、「国家・中間集団・個人」や「公的領域と私的領域」といった区分が、脱構築されていく過程の中で、一般用語としてだけでなく、学術用語としてもしばしば「居場所」という概念が用いられるようになる。近代社会論の文脈における中間集団論・市民社会論の概念ではとらえきれない、自己の漂流の側面が、現代社会においては強調される。

居場所については、初期シカゴ学派のモノグラフは、学校・家庭などの慣習的世界から離脱した人び

とが、街へと漂流していくさまが描かれる。H・B・カプランの言葉を借りれば、人は、自己評価のチャンスを探求めて、彷徨するというわけだ (Kaplan 1975; 宝月 2004: 104) <sup>5</sup>。シカゴ学派の社会学者が、「居場所」という言葉を明示的に用いているわけではないが、シカゴ学派の文献のなかには、現在の「居場所」の先駆的考え方を読みとることができる。

帰属を求めて、居場所探しをするのは、背後には、先に述べたような自己の複数性の側面も影響している。

フレイジアのテキストから、自己の居場所を求めて漂流する人の姿を拾ってみよう (西川 2002: 179-80)。

南部の田舎のコミュニティでは、人々の行動は多かれ少なかれ教会や結社 (lodges) によってコントロールされ、善悪にかんする考えはコミュニティの慣習によって決められていた。だが、都市に移住後、単調なありきたりの生活から解放されるようになり、そして葛藤する規準や都市の変容する行動様式と接触するにつれ、自分の行動について考え始めるようになる。そして行動は合理化 (rationalization) される。それは伝統的な善悪の考えとは矛盾するものであった。夫から遺棄された第三ゾーンのある女性もそのようなケースの一つである。その女性はテキサスで生まれ、母親の手によってシカゴに連れてこられた。その母親もまた遺棄されていた。母親が亡くなった後も、自分が聖歌隊に属していた教会とかかわりをもち続けた。彼女は、前妻をきちんと扶養したことで知られていたやもめの男と結婚した。そのため、彼女は働かずにすんだ。夫となったその男は食堂車のウェイターで、やはりよき扶養者となってくれた。だが、「どの女も彼には充分ではなかった」。彼は一度に何週間も家を空け始め、ついには彼はシカゴのどこかに消えてしまった。それで彼女は自分の生計をどのように立てたらよいか考えなければならなかった。そして彼女はとあるホテルに職を見つけた。しかしその客の男たちは立居振舞いから話す言葉から何から何まで「ひどい」ものであった。彼女は自分の生活が抑圧されるのを感じた。そして彼女はその職場を立ち去った。後に、彼女は別の場所で職を見つけることになる。しかし、また同じような理由で職をやめざるを得なかった。

そしてだんだんと、彼女は教会とのかかわりを失っていった。なぜなら他のメンバーと同じくらいきちんとした服装ができなくなり、会費も払えなくなったからである。彼女は次のように話している。「2、3週間前、通りで牧師に会いました。彼は、たとえおさめるお金がないにしても、教会に来なくてははいけませんよ、と言いました。ですが、私はお金もおさめられないのに行くのは嫌なのです」。

彼女は都市で自分は一人ぼっちだと気づいたとき、「彼氏」を作ることで「応答を求める願望 (wish

---

<sup>5</sup> アジア地域、とくにわが国日本においては、「シラケ世代」「プレッシャー世代」など若者の「世代」のレイベリングと同様、「太陽族」「竹の子族」など「～族」といったレイベリングがしばしばなされてきた。それら「～族」はそれぞれの時代において背景も事情もまったく異なるが、慣習的世界 (customary world) から離脱し、都市的世界に漂流 (drift) し、自己評価を回復しようとする姿が往々にして描かれているようにも思われる。

for response)」を満たそうとした。そうしてできた彼氏と親しくなった。「彼は清廉かつ正直な紳士で、女性の扱い方を知っています。もしそうでなかったら、彼と何もかわりをもつことはなかったでしょう」と彼女は話す。そして、次第に通常からは外れた性関係を持つようになった。このことを彼女は隠したがった。しかし彼女は、自分自身に対しては自分の行動を合理化し、正当化しようとした。たしかに彼女は離婚を認めることはできなかった。そして金のために自分自身を売るなどとんでもないことであった。彼女は「そのように育てられて」はいない。「私は真面目な女の子として育てられました」と語る。しかしながら、愛する「きちんとした」男と性関係を持つのはまた別であると考えようとした。それが果たして正しいのか間違っているのか彼女自身は分からなかった。だが彼女は「合理化」を行った。「こんな古い諺があります。『操行の良い二人はお互いを汚さず (Two clean sheets cannot dirty each other up.)』って。もし二人は愛し合っているならば、誰でも自分たちの思うようにできる権利があるのです」(Frazier 1932: 166-8)。

居場所に類似した概念は、シカゴ学派のドキュメント分析法の金字塔となっている『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』の主要著者である、ウィリアム・アイザック・トマスの社会心理学のなかでも論じられている。トマスは『不適応少女』(1923)のなかで、「4つの願望」として知られる有名な概念を定式化した。その4つの願望とは、「新しい経験を求める欲求」、「安全を求める欲求」、「応答を求める欲求」、「認知を求める欲求」である(Thomas [1923]1969: 4)。これらはトマスによれば、「社会の中に自分が受け入れられて初めて満たされるような多種多様な願望」の一般的なパターンである(Thomas & Znaniecki [1918-20]1974: 72=1983: 67)<sup>6</sup>。

居場所の考え方は、親密圏と深いかわりを持っているが、トマスが、「応答を求める欲求」という形で理論化している。トマスの社会心理学は、居場所が家族だけでない、家族外のコミュニティにも存在する可能性をも示している。ここに、親密圏と公共圏が流動的に出会う理論的可能性を有している。

### 3.5 ジェンダー化された「親密圏」

いわゆる性的マイノリティと称される問題や、性の多様性に関する議論は、第二期(波・次)フェミニズム運動の問題点を超越した、第三期フェミニズム運動あるいはポストモダン・フェミニズムの文脈でなされることが多い。しかし、近代化論と考えられているシカゴ・モノグラフにも、ジェンダー化された「親密圏」を形成している事例が散見され、近代家族像と異なる「親密圏」の多様性が示唆されている。たとえば、有名なゾーボアの『ゴールド・コーストとスラム』では、シカゴのウォータータワーのふもとの、タワータウンと呼ばれる地域において、近代家族像にとらわれない形で人々が「親密圏」を形成しようとしている様子が描かれている。このことは、「親密圏」を家族に限定する必要性がないことをも示している。

<sup>6</sup> 『ポーランド農民』の第1部においては、3つ目の欲求は「支配を求める欲求」となっていた。『不適応少女』においては、「支配を求める欲求」のかわりに「応答を求める欲求」が定式化されている(cf. 藤澤 1997: 170)。

一時的であっても親密な個人的接触は、「スタジオ」や「喫茶店」における「ボヘミアン」生活の特徴である。「ムラ」の慣習にとらわれない伝統や個人主義の哲学、街がもたらす匿名性などが結びついて、これらの接触は慣習にとらわれない自由なタイプの性関係を生じさせている。さらに、タワータウンの自由恋愛に関する議論や性的乱交にたいする評判は、慣習の欠如や匿名性と結びついて、ボヘミアンだけではなく、タワータウンに、より大きなコミュニティの抑圧的慣習からの逃避場所を求めている多くの人々をスタジオへ引きつけている。彼らの多くはボヘミアンに溶け込んでいるが、他の若干の人々はその中で孤立してしまっている。

.....

性的慣習を無視することは、これまでも常にボヘミアンの特徴であった。彼らは結婚制度を自由や自己表現を阻害し、パーソナリティを拘束するだけのものと見なしてきた。

.....

.....性行動の歪んだ形態は、「ムラ」の中に泊まり場所を見つけだしている。「ムラ」の喫茶店やスタジオに頻繁に訪れる訪問者のなかには多くの同性愛者がいる。

.....

私の友人は知人に、日曜日の午後、お茶を飲みによく知られた「ムラ人」のスタジオへ連れて行くように求められた。そこには大勢のグループが来ていた。男たちは、部屋の片隅で煙草を吸いながら語り合っていた。彼らの多くは、腕を組みあったり、他の人の椅子のアームに座ったり、肩の上に腕をかけたりしていた。しかし彼は、そのグループは古い友人たちだとばかり思っていた。数週間後、彼は再びお茶を飲みに行くことを求められた。今度は夕方まで残った。まもなく男たちはまるで女たちのように戯れ始めた。午後会った男が彼に腕を回してきた。彼は立ち上がって、彼を連れてきた知人のところへ飛んできて、「もう、帰ろう」と言った。街の通りに出たとき、彼は「ここは一体なんてところだ」と尋ねた。「なぜって、君は知っているのかと思った。ここはホモとレズビアンでシカゴのなかではもっともよく知られているところさ」と、友人は答えた。そこには「ムラ」によく訪れ、彼らのリーダーにちなんだ名の「ブルーバード」として知られている男の同性愛者のグループがいつもいる。暑い夏の夜には、彼らは遊歩道のベンチにそって散らばっている。リーダーがドゥレイクの方に向かって歩き始めると、ベンチからベンチに「ブルーバードが来るぞ」といったささやきが伝わる。彼らは彼がその夜のパートナーを選ぶまで、彼が素通りするようにと彼とふざけあう。素通りすると残りの者は、二人ずつ組んで彼らの「ムラ」の愛の巣へと向かうのである。

.....

「ムラ」の親密で芸術的な生活は都市の他の人々にはあまり注目されないままであった。

(Zorbaugh 1929=1997: 116-9)

公共圏（というよりも公共空間）における親密圏を構築した、逸脱的親密圏の研究としては、シカゴ学派の流れを汲んだシンボリック相互作用論の研究のひとつとして取り上げられる、ハンフリーズの公衆便所 (tea-room) 研究が有名であり、欧米の社会調査のテキストによく登場する (Humphreys 1970)。ただし、上のゾーボーのテキストに見られるように、分析はやや粗野ではあるが、初期シカゴ学派の文献にはすでに、ジェンダー逸脱的親密圏に関する記述がなされており、近代家族像とは異なる、多様な親密圏（あるいは擬似親密圏）の可能性が示唆されている。

## 4 コミュニケーションのグローバル化——中間集団モデルの限界？

### 4.1 中間集団モデルの限界とコミュニケーションの流動化

諸国民が専門外交官を介して交渉し、交換する生産物、国勢調査報告書、そして如才ない旅行者の控えめな観察を主な手がかりとして相互に知りあうような、実質的な隔離状態で住んでいる間は、人種偏見は国際関係を阻害しなかった。国際的取引の拡大、来住者の増加、そして諸民族の相互浸透とともに、光景が一変する。鉄道、船舶、そして電信が地球上の諸民族を急速に流動化しつつある。諸国民は隔離状態を脱し、異なる人種を隔ててきた距離は通信の拡大によって急速に短縮されつつある。(Park 1917=2006: 5)

これは、バージェスと並ぶ初期シカゴ学派の「巨匠」、ロバート・E・パークが、バージェスのシカゴ大学赴任間もない頃に述べていることである。

相互作用・コミュニケーションの形態が流動化した結果、個人と国家をつなぐ中間集団のモデルの実効性は、かならずしも有効なものではなくなった。「異文化理解」というグローバル化時代のキーワードも、市民社会・中間集団のモデルではとらえきれない側面をあらわしている。

### 4.2 異文化理解

異文化理解は、初期シカゴ学派の概念で言えば、社会的コントロールの一つの様相である。だとすれば、異文化理解がなりたたない究極の事例は、「社会解体」が進んでいた、20世紀初頭のシカゴの状況である。

デュルケムに一つの端を発するコントロール理論によれば、慣習的社会秩序への絆が弱まったり崩壊したりすると、人々は「解放」されて犯罪に走るようになるという (西川 2002: 173)。デュルケムは、有名な『自殺論』のなかで、「所属集団が弱まるほど人はその集団に頼らなくなり、その結果自分自身だけに頼ることになり、自分の私的関心に基づくもの以外の行動規則を認知しなくなる」と述べている (西川 2002: 173)。

このようなデュルケムの考え方を、初期シカゴ学派の研究者たちは「社会解体論」として受け入れて

いく。トマスとズナニエツキは『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』第二巻のなかで、社会解体を「既存の社会的な行動ルールが個々の集団の成員に及ぼす影響力の減退」と定義している (Thomas & Znaniecki [1918-20]1974: 1128)。フレイジアは、奴隷解放後の黒人家族の生活解体と再組織化のプロセスを描いている。黒人家族の生活解体の多くは、その地域の社会解体と密接に関連していた。フレイジアは、解体した黒人家族が、再生 (renewal) へのプロセスをたどっていくことについて、バージェスから次のような引用をおこなっている。「解体が再組織化へと向かい、より効果的な適応 (adjustment) を生み出している限り、解体は病的なものではなく、正常なものとして考えられなくてはならない」 (Frazier 1932: 84=Burgess 1925: 54, =1972: 56)。

当時のシカゴは、南部からはおびただしい数の黒人、外国からは、ポーランド、ロシア、イタリア……、などから、多くの移民が大流入してきた。お互いに言葉は十分には通じない。人種上の偏見も根強く、お互いアタッチメントもとくに感じない (Hirschi 1969)。ゴフマンの言葉でいえば、敬意 (deference) の交換による相互作用儀礼は成立せず、このことによって、持続的で安定した社会関係の形成は困難であった。

このようななかで、当時、異文化理解という形で社会的コントロールが発揮されていた例を、フレイジアのテキストから見てみよう。当時、自分たちの生活の考え方や行動様式を、産業社会における職人階級の伝統から受け継いでいた黒人家族はごくまれであった。だがここで見るのは、白人の産業集団の理想、規準、伝統を引き継ぎ、それにほとんど完全に同化していた黒人家族の例である。その家族の若い女性は、上流階級の黒人と対立することがよくあった。なぜなら彼女は、自分自身は黒人の労働者階級だと見る傾向があり、労働にかんしてラディカルな考えを持っていたからである。彼女は父親について次のように語る (Frazier 1932: 240-2)。

街で有名な石工・煉瓦積み職人で、彼が商売を「盗んだ」ビル・ストンパート (Bill Stompert) (白人) さえよりも優れていました。外出すると父親は自分が建てている家や建設途中の橋に私たちを連れて行ってくれました。それはどれもこれも不思議で、末の妹と私は恐れかしこまったものでした。父親は建設中の家に登るのを許してくれました。そして私たちにどのようにモルタルを混ぜ、扱い、こてで塗るかを見せてくれました。彼は自分の道具を大事にしている、仲間が家にその道具を借りに来ても、決して貸そうとしなかったのを覚えています。

だから私たちはかなり早い時期から労働者階級を心から尊敬しつづけていました。なぜなら私たちは今も昔も彼らの一員であり続けているからです。私たちは父親からも母親からも、建設労働者としての気質を尊敬するよう教えられました。父のところへ働きにきている男たち (ほとんどは白人)、労働者と同様に機械工は、コミュニティを建設する力となっているのだと私たちは考えていました。私たちが、家族の男たちすべてに誇りを持っていたのは、おそらくこうした考えからでしょう。

コミュニティの黒人のリーダーによって作られた規律は間違っていると私たちは思います。それ

は専門職階級のトップにいる黒人が決めている傾向にあります。そうした人の数はけっして多いとは言えず、事実めったにいない、そしておそらくそのごく少数のためになさけない畏怖を抱く人が多いのでしょう。ご存知の通り父親と私のおじたちは皆ベテランの職人であると考えられていて、ヘアードレッサー（つまり髪の装飾品の製作）の生業を覚えた私の母は、存命中ピッツバーグの素敵な店で最もすばらしい職人であると評判でした。それは彼女が結婚する前のことでした。

その街の習慣とはまったく対照的に、私たちがフォーマルにもてなしをしたのは、私たちの友人だけでした。私たちは、家族の威信のために、「名士」や説教者、来客（visitors）をけっしてもてなすことはしませんでした。

私たちの家族はそういうことをしなかったし、私もいままでそうしようと考えたことはありません。母方の私たちの家系はよく知られていて尊敬されていたために、白人集団のエリートとの私たちの関係は何気ないものでごくありふれたものでした。しかし私たちの家庭はおおかた最も裕福だったと言えるのですが、何一つ不足なく家具がそろっていたし、私たちの家その経済的地位に見合ったものになっているか気をつけていました。それはシンプルでしたがしかし品のよい家具がそろっていました。これは私たちの黒人の友達のあいだで広がっていた規準とはまったく異なっていました。彼らは、私たちが自分たちの地位に反して裕福な家を真似しないために、私たちのことを不思議だと考えました。彼らはまた、私たちがギンガムとパーケール製の服を着て、丈夫ながらもぺちゃんこな靴と小さなストッキングを履いていたために奇妙であると考えました。少女G-（裕福な白人の少女）は美しい服装をしていましたが、その賞賛にねたみを持ったことはありませんでした。というのは、私の母親はいつも私たちに、重要なことは「私たちなりに服を着る」こと、そして「こぎれい」で「きちんと」見せることであると教えていました。私たちの日曜日用の服さえシンプルで、ほかの黒人の子どもが私の着ているシンプルな服をからかうと、私は次のように言わないといけないことがよくありました。「まあ、いずれにしても、私の父親はベテランの機械工だけど、君のお父さんは白人に仕えるただの召使に過ぎないでしょ」。もしくは、「君がサテンを着ると素敵だけど、同じように私もギンガムを着ると素敵に見えると思ってるよ」。こう言うことで、いつも会話は終了したのでした。

私たちはピアノを持っていました。それはとてもいいものでした。なぜなら母は家に娯楽があるべきだと考えたからで、そして彼女は音楽のもつ文化的影響を信じていたからです。多くの黒人は大きな家を持っていて、高い家具をそろえていましたが、私たちは私設図書館の会員となっていた唯一の「黒人の」子どもたちでした。公立図書館はなく、母は会員カード代を払う必要がありました。私たちはいつも三枚カードを持っていて、私たち姉妹二人にはそれぞれ一枚ずつ渡されました。政治にかんしては、父は、労働者階級集団のねらいと情熱に共感を示す人ならばよき候補者であると考えていました。私は彼が市長選でJ-に反対票を投じたのを覚えています。なぜなら彼はH-炭鉱を所有していて、組合に入ることを許さず、彼の雇い人に会社の店で買い物をするように強制したからです。家の外で父と、主に白人の機械工だった彼の友人との間でなされる会話を私たちは聞いて

ていました。私のプロレタリアートへの関心はこうした子供時代に生まれたのだと信じております。

私たちは、母が「道化役 (antics)」と呼んでいた J-家を笑いものにすることがよくありました。彼らは最近豊かになりました。古き豊かな集団を模倣することは、模倣といっても不正確なんですけど、私には黒人の労働者階級と同じ種のを思い出させます。彼らの苦労は私たちはばかばかしいと思っていましたし、とにかく J 夫人が D 家 (エリート) に「取り入ろう」としているときや、家の家具を D 家のように取り換えようとしているのを私たちはいつも分かっていた。黒人の床屋の妻である S-夫人は、A-D-氏みたいに見えるような服装をして、「まさに C-家のような」カーテンを買っているのもいつも私たちは見ていました。私の家は特殊でしたが、父の友人の家と似ていました。(Frazier 1932: 240-2)

異文化・異人種・下層の人びととも活動をおこなおうとするこの珍しい上流階級の黒人家族の例は、家族という舞台裏での相互作用の様子を知ることができるものとなっている。フレイジアの記述を文字通り受けとれば、それは上流と下流黒人家族の「脱分化」の作用であるということになる。しかし、お互いの階級の「誤った」イメージに基づいて、そうした行為様式を取得していることがある。ゲーリー・マルクスの 1960 年代のゴフマンのコースのターム・ペーパーをもとにした研究では、白・黒人 (ブラック・ブルジョア) と、黒・白人 (ビート族) がお互いに誤ったイメージで模倣していることを指摘した (Marx 1967)。このことは、脱分化に見えながら、結局は分化が起こっていることを示唆している。こうしたことが、1910 年代、20 年代の黒人家族のなかでも起こっていたかもしれない。皮肉にも、異文化理解における流動的な「擬似親密圏」の可能性をも示唆するものとなっている。

### 4.3 英語・言語

グローバル化の時代において、英語が共通言語になりつつあることは、多くの人が実感として感じていることである。地球言語として英語が措定されることに対して、ローカリゼーションの思想と響きあうような抵抗の動きもあるが、実際には異文化の人と、お互いに母語ではない英語でコミュニケーションをとるケースは少なくない。

ポストモダンの理論家が問題視する言語帝国主義の様相は、グラムシとブルデューの概念で言えば、ヘゲモニックな象徴的暴力としてとらえられている (西川・大空・姫岡・夏編 2003: 105)。

先に触れたアメリカ化の動きとは、ひとつには、英語化の動きでもある。有名なシカゴ・モノグラフである『タクシー・ダンスホール』には、こんなシーンがある。アメリカニゼーションの過程にある、ヨーロッパ系移民の言語の「英語化」である。

「ユーレカダンス学院は、ある幹線道に面した粗末な造りの店舗ビルの 2 階にあり、これといった特徴もない施設である。ぼんやりと光るネオンサインが『ダンス学院』の文字を点滅させている。階段入り口にたむろする若者たちやタクシー、そして時折鳴り響くジャズ演奏の音が、通りかかる



者にここがシカゴの歓楽街であることを教える。しかしより詳しく見てみると次のような文字のかかれたくくりつけの看板に気付く——『今宵踊りましょう！ 美人インストラクター50名がお待ちしております』

ほどなく、客とタクシー・ダンサーが到着しはじめる。自動車でやって来る客もいるが、たいていは路面電車でやってくる。たまに2・3人のグループの場合もあるが、大半は一人である。……煙草をくゆらし野暮ったくてうるさい若者もいれば、一人でやってきてぼつんと立っている身なりのしっかりした人あたりのよさそうな若者もいる。また他方では、中年の男がおり、そのずんぐりした背中とだらだらした足取りから彼の労働者生活ぶりがよくにじみ出ている。彼らのうちには英語を流暢に話すものもいるが、大抵そのブローケンな英語から、彼らがアメリカニゼーションの過程にあるヨーロッパ系移民であることがわかる。さらにみればこざっぱり着こなした小柄なフィリピン人たちが……入り口に静かに吸い込まれていく……。(Cressey 1932: 4-6; 中野・寺岡 1994; 寺岡 1997, 2003 ただし下線は報告者による)

ここで論じられているのは、シカゴという一都市における移民たちの「同化」の過程と見ることもできるが、さまざまな背景をもった人々が、マスターカルチャーと出会い格闘する、現代の世界社会の縮図として見ることはできないわけではない。先のアメリカニゼーションとグローバル化を厳密に区別する考え方にも留意することで、英語という言葉が社会に及ぼしていく力に注目することができる。

#### 4.4 消費文化

20世紀後半には、人種と多文化主義をモチーフとしたファッション広告が話題になったという(西川・大空・姫岡・夏編 2003: 232-5)。消費文化にエスニシティの要素が組み込まれるのは、何も20世紀後半に始まったことではなくて、シカゴ・モノグラフにも描かれている。たとえば、クレッシーの『タクシー・ダンスホール』で描かれるダンス教室では、踊り別に加えて、人種別の教習所の宣伝が描かれているように(寺岡 1997: 422, 2003: 158)。

近代初期における内部指向型の人々で構成される社会でなく、後期近代における他者指向の傾向にある社会は、高度大衆消費社会を支える一つの側面である。アジアにおけるわが国、日本でいえば、1980年代に若者期を迎えた「新人類世代」が主な担い手となったことが知られている。消費文化の始まりは、日本では、プレ団塊世代、団塊世代が創製した若者文化であると言われているが、戦後に消費文化が開花する現象は、初期シカゴ学派の社会学者が前提とした当時のアメリカの状況も同じであった。

第一次世界大戦後、多くの若者たちが、戦地から祖国アメリカに戻ってきた。戦地から戻ってきた若者たちは、スピードと興奮、現世をもっと楽しんでいこうという享樂的な気分であった。そのころ、従来のモラルと反する若者文化が醸成された。モラル革命と呼ばれる、古いモラルからの解放と新しい性意識の誕生である。当時、チャールストンと呼ばれるダンスが爆発的に流行した。ジャズに合わせて奔放に、リズムに合わせて両膝をつけたまま、足を交互に跳ね上げる形で踊るダンスである。もともとは、

白人ではなくて黒人文化のなかで生まれたエスニックカルチャーであった。セシル・マックと、ジェニー・ジョンストンが 1923 年、黒人ばかりのレビュー「Running Wild」のなかで踊ったのが最初とされ、そのときの曲が、ジェームス・P・ジョンソンの作曲した「Charleston, South Carolina」であったところから、この名がついたとされる（『ブリタニカ国際大百科事典』参照）。

当時、時代の変化に敏感だったのは、ジェンダー的側面でいえば、女性のほうである。当時、短い髪と短いスカートは、フラッパーと呼ばれる装いであった。

こうした都市の光の陰では、多くの移民や黒人が、厳しい仕事に従事することで、都市の光の側面を支えていた。初期シカゴ学派のモノグラフに登場するように、都市に流入する移民たちであふれ、かなりの低賃金で労働に従事せざるを得なかった。

次のイタリア人移民の手記は、過酷な労働条件のもとで暮らしていた移民の一側面を表している。

「私が育ったのは、まるで映画の舞台になりそうな地獄の台所と呼ばれるところだった。アパートの住人たちは、みんな貧しくて大変な生活だったが、助け合って暮らしていた。私たちは、ハドソン川でよく泳いだ。いつも 20 人くらいの子どもたちがいて、栈橋から飛び込んだり、本当に楽しかった。思い返せば、あのハドソン川のごみためのなかを泳いでいたんだ」（『映像の世紀』第 3 集（それはマンハッタンから始まった））

#### 4.5 メディア

メディアは、グローバル化を促進する。相互作用の形式を大きく変容させた。これまでアクセスできない時間・場所へのアクセスを可能にした。メイロウィッツが、ゴフマンを援用して言うように、メディアは、公と私の領域、表舞台と裏舞台の障壁を溶解させた（Meyrowitz 1985）。それにより、社会化・社会関係に大きな影響を与えた。

それと同時に、メディアの発達は、公共圏と親密圏の壁も、流動化している。これらのことは、すでにバージェスが、多くの異なる属性の人が出会い、住み分ける社会行動を描く、人間生態学の議論のなかで考えていたことである。バージェスの既刊行の文献だけでは、このことは分かりにくいので、シカゴ大学レーゲンスタイン図書館のスペシャルコレクション調査センターに眠る、バージェスの人間生態学の講義レジュメからすくい上げてみよう（西川 2008b: 82-112; Burgess Papers; Burgess Papers Addenda）。

バージェスは、自分の担当する「人間生態学」の講義において、コミュニケーションのメディアが社会生活に与える影響について話している。「コミュニケーション（のメディア）」という項目である。ここでは、生態学のおよび社会心理学的概念としてのコミュニケーションの問題について扱われている。コミュニケーションもまた、社会秩序との関連で考えられる。コミュニケーションのメディアは、生態学的秩序とも関連を持っている。コミュニケーションの手段は、いうまでもなく、人間社会の地域の拡大と密接な関連を持っているのである。コミュニケーションと生態学的組織化にかんするレベルは、田

舎と都会、あるいは地域・国・国際レベルまで考えられる。バージェスが研究・学習課題として挙げるのは、「メディア（直接の会話、あるいは手紙、電話、電文など）における変化によって、コミュニケーションの性質はどのように変化するのか?」「さまざまな形態のコミュニケーション（日刊紙、映画（motion picture）、ラジオ、テレビ）のオーディエンス」「さまざまなコミュニケーション・メディアのニュース」「メディア・コミュニケーションとテクノロジーが、子どもたちにどのような影響を及ぼすか」というものである。社会学教育の現場では、その時々新しいメディアの社会への影響が話題になることが多いが、バージェスもまた、メディアとテクノロジーの発達が生態学的組織化にどのように影響を及ぼすか関心を寄せ、講義でも話題にしていたようである。（西川 2008b: 89-90）

再度述べれば、メディアは相互作用・コミュニケーションの領域を拡大し、グローバル化へと志向させる。メディアの形態は個人間のものから、個人・機関 対 不特定多数、不特定多数 対 不特定多数 など、さまざまな形態のものがあるが、いずれのメディアも自己の領域を拡大させ、（一方向性のメディアさえも）相互作用の領域を拡大させる可能性を有する。

メディアが、場所感覚を喪失させ、舞台裏の領域へのアクセスを容易にする側面は、シカゴ・モノグラフにもしばしば登場する。フレイジアによれば、都市では出版物がとても重要な役目を果たしていた（Frazier 1932: 198-9）。読み物は、彼女らにとってセックスの知識を得るのに役に立っていたのである。たとえば『ラブストーリー（Love Stories）』、『本当の話（True Stories）』、『情事（Love Affairs）』、『真実の告白（True Confessions）』そして『おとぎ話（Fairy Tales）』という雑誌を読んでいたという少女の言うことは他の少女とも共通していた。ある少女が自分の生活史を語る際、これらの雑誌の一つに載っていた、未婚の母とその子どもに焦点を当てたあるストーリーを思い起こしていたのは特筆すべきことであるとフレイジアは言う。

メディアが、あらたな逸脱を生み出した。それは、初期シカゴ学派の時代から存在していた。単純なメディア悪玉論を主張するということではなく、メディアが、既存の社会関係を変容させた側面は注目され続けているということである。メディアは、表領域と裏領域、ないし公と私の壁を溶解させる。公共圏と親密圏の境界も流動的なものとなるのである。それは、原型としては、パークがすでに 1917 年に論じていたように、「電信が地球上の諸民族を急速に流動化しつつある」過程であり、「諸国民は隔離状態を脱し、異なる人種を隔ててきた距離は通信の拡大によって急速に短縮されつつある」過程である（Park 1917=2006: 5）。

## 5 グローバル化と国家の変容——国境の脱構築？

### 5.1 グローバル化と国境？

商品交換のため地表全域に交易通信網を拡大した人間の動機と同じ動機が、今や人口の分布に変化をもたらしつつある。商品同様にこうした人口が流動的になるとき、世界規模の経済的人間的競

争は実質的に無制限となるであろう。個々の国家が維持する慣行や来住制限のような人為的な障壁がこれを阻むが、自然的な障壁が崩れるとき、人為的な障壁の維持はますます困難になるだろう。

(Park 1917=2006: 6)

グローバル化時代の到来を予期するかのように、パークは 1917 年の時点でこう述べているのである。「グローバル化」が「国際化」と異なるのは、国家の国境の障壁を低く見積もる点にあるとされている。本節では、流動化する近代家族・市民社会・国家の三層構造の最後のひとつ、国家にかかわるグローバル化のキーワード、「移民」、「経済格差」、「福祉国家」をとおして、シカゴ学派のとらえる「国家」の流動性について明らかにしてみたい。ここからは、国家政策だけでなく、家族をはじめとした多様な親密圏、さらには民間団体・組織など多様な供給源によるセーフティネットの必要性が示唆されている。

## 5.2 移民

現代は、移民の時代であると言われている（西川・大空・姫岡・夏編 2003: 24）。日本はアカデミア外部においては、前世紀を通じて、欧米諸国に比べて、民族性・エスニシティについて鈍感な雰囲気が続いていた。だが、近年のグローバル化の動きとともに、他のアジア諸国に追随するように、民族性についての意識や議論がなされつつある。

高度近代化・グローバル化のひとつのキーワードが、移民であるとすれば、大量の移民の生活解体と再組織化をはじめ描いたのは、シカゴ学派の社会学者たちである。

20 世紀初頭のシカゴは、欧州や南部からさまざまな人種の移民が大量に流れ込んできていた激動の時代であった。そのなかで新しく入ってきた移民たちはどのようにして新しい環境に適応していくのか、これが初期シカゴ学派の社会学者たちの一つの大きなテーマであったのである（西川 2003c）。

現在のグローバリゼーションの理論は、国境を越えた移民たちのフローや、かつてはある祖国に住んでいた人々が、さまざまな異国に住んでいるものの、際立った移民間ネットワークを築いていることを指摘する（Held ed. 2000=2002: 30-1）。しばしば「ディアスポラ」という言葉で表現されるが、国境を越えた社会諸関係が、空間を超えて広がっていく過程について論じられる。

このような現代のグローバル化の理論に比べれば、初期シカゴ学派のパーク流の人種関係論は、局域的にも見える。というのは、パークによれば、シカゴにおける黒人の行動は、アフリカの文化や遺伝とは関係ないからである。フレイジアもまた、パークに習い、黒人の道徳的退廃とも呼べる行動は、アフリカとは関係ないと主張する。それまでの言説では、当時のアメリカ黒人のあらゆる性行動と、アメリカに送られてきた多様な黒人奴隷との関連性が根拠なく主張されていた傾向に対抗するためである。

とはいえ、フレイジアも付言するように、存続してきたアフリカの伝統と、アメリカでの黒人習慣に関する報告がなかったわけではない。たとえば、1892 年のアラバマ（Alabama）での黒人結婚式で見られた行動はアフリカのズールー族（Zulu）のようだったという報告も見られる。また、ある元奴隷に

よれば、彼の別の仲間の奴隷がイスラム教徒と思われるような礼拝の儀式をしていたという。このように、黒人がアフリカ時代の集団の文化的習慣を、そのままアメリカに持ち込んでいたことはあった。しかしそれはそれほど多くはなかった。アフリカの部族 (tribal) の生活の解体のプロセスは、アフリカ西海岸の大きな奴隷市場から始まった。そしてそれはアフリカの内部へと浸透していった。奴隷たちはそれぞれアフリカの色々な場所からやって来ていたために、共通の伝統やコミュニケーションの手段を持ち得なかった。そしてまもなく奴隷たちは祖国、アフリカの記憶を失っていった。こうした点について、ロバート・E・パークは、「奴隷たちは散在しているプランテーションにそれぞれ送られたため、仲間や親類と接する機会が少なかったからだ」と指摘する (Frazier 1932: 22-4)。

確かに、南部の黒人は、他から孤立した奴隷のプランテーションで迷信めいた信念を持ち、そしてそれに基づいた行いをしていたと言える。ただし、南部黒人はそのようなプランテーションで、何らかの形で「家族生活」も展開していた、とフレイジアは指摘する。奴隷制が黒人家族の生活に対して与えた影響に関しては意見が分かれている。たとえば、ウェザーフォードは、奴隷制は黒人家族のモラルを向上させる働きをしたと考えた。しかしデュボイスはこれとは全く反対の見解を示している。すなわち、当時の黒人家族の道徳的退廃は、奴隷制の影響のためだというのである (Frazier 1932: 24-5)。

黒人の道徳的退廃は、フレイジアによれば、社会解体にともなう生活解体の結果である。多くの貧しい移民たちが集住していたのは、バージェスの同心円地帯モデルで言う、「推移地帯」(Zone in Transition) と呼ばれる 2 つ目のゾーンである。この地域には、『ゴールド・コーストとスラム』に登場するスラム (Slum)、下宿屋街 (Roomers)、暗黒街 (Underworld)、シシリー (イタリア) 人街 (Little Sicily)、『ゲットー』に登場する貧しいユダヤ人街 (Ghetto)、中国人街 (China Town)、レックレスの『シカゴの悪徳』で描かれているような売春地帯 (Vice)、そしてフレイジアが描く黒人居住区 (Black Belt) の退廃地区などがこの推移地帯に存在し、相対的に脆弱で不安定な人種関係ネットワークを築いていた。

### 5.3 経済格差

グローバル化は、多次的過程であり、複雑で重層的な地理状況と結びついている。こうした新しい地理状況を測ることは困難で、単純な量的測定だけでは適切なものとはなりえない。例えば、トランスナショナル企業の数、こうした企業のグローバル市場における占有率、移民人口ないし環境被害地といった規模はフローの一部や相互関連の規模と強度を知る重要な手がかりとなりうるが、文化の転移や社会的不平等の程度を測ることはそれほど容易なことではない。(Held ed. 2000: 35)

グローバル化は、量的測定で適切にとらえられるわけではない。そして、グローバル化は、資本主義の宿命であるにとらえられる向きがある。それと同時に、利益は、等しくは分配されないということも、

グローバル化論では強調される<sup>7</sup>。

そこでは資源を多く有するものが、ますます多くの資源を獲得することとなる。とくに、文化的資源・資本、すなわち教育を有する者が、グローバル化する社会のなかでは、勝ち残ることができるとされる。

ただし、時間と空間の圧縮の現象により、利益の分配に不平等が生じるというのは、周知のとおり、初期シカゴ学派の社会学者たちが、バージェスの同心円地帯モデルを用いて描いていることである。バージェスは、シカゴ市を、ループと呼ばれる都市中心部から、放射状に広がる、5重の同心円で描かれる。すなわち、都市の中心から外側の周辺部に向けて、「中央ビジネス地区」「推移地帯」「労働者住宅地帯」「住宅地帯」「通勤者地帯」という地域が同心円状に並ぶ（西川 2008b; Burgess 1925）。

この同心円モデルにおける一番内側のゾーンは、中心ビジネス地区 (central business district: CBD)、すなわちループである。わが国日本の都市社会学者である鈴木栄太郎の言葉を借りれば、ここには都市の「結節機関」が集中している。すなわち、デパート、高層ビル内のオフィス、鉄道駅、大ホテル、劇場、市役所などである。現地の人たちは、シカゴのダウндаウンの歴史的な中心部として、ここを「ループ」と称する。ループと呼ばれるのは、高架鉄道の環状線に囲まれているためである。

2つ目のゾーンは、「推移地帯」(Zone in Transition)である。わが国では「遷移地帯」と訳されることもあるが、混乱を避けるために”succession”の概念を「遷移」と訳し、”transition”を「推移」と訳すことが多くなってきている。当時、シカゴには大量の移民や南部黒人が流入していた。その多くはとても貧しく、かつ言葉もお互い通じないなどのために、人と人とのコミュニケーションは希薄であった。つまり、インフォーマル・コントロールの力の低下に起因した社会問題が多く集積している地域であった。シカゴ学派の「社会解体論」は、こうした地域を研究することから生まれたともいえる。この「推移」地帯と呼ばれるのは、流動性・移動性・変動が激しく、都市中心部に隣接しており、都市の拡大のプロセスの影響を大きく受けている地域だからである。この地域は、かつては金持ちが住む華やかな地区であった。だが、20世紀初頭の当時、この地域に建物を所有する地主は、やがて都市再開発によって、この地域が都心部に取り込まれると考えた。そのため、古い建物を改修せずに放置するか、あるいは『ゴールド・コーストとスラム』で描かれているように、「貸部屋」として貧しい移民に安い賃料で提供していた。『ゴールド・コーストとスラム』に登場するスラム (Slum)、下宿屋街 (Roomers)、暗黒街 (Underworld)、シシリー (イタリア) 人街 (Little Sicily)、『ゲッター』に登場する貧しいユダヤ人街 (Ghetto)、中国人街 (China Town)、レックレスの『シカゴの悪徳』で描かれているような売春地帯 (Vice)、そしてフレイジアが描く黒人居住区 (Black Belt) の退廃地区などがこの推移地帯に存在した。

3つ目のゾーンは、「労働者住宅地帯」である。ここには、勤勉に働くことである程度組織化された生活を送る、貧困を脱した労働者階級の人びとが住んでいた。工場勤務のブルーカラーが多く、その多くは移民2世であった。推移地帯に住んでいた移民は、安定した生活を獲得すると、やや環境条件の良好

---

<sup>7</sup> 2009年4月時点での日本においては、数年前の「格差」にかわるタームとして、「貧困」が主流なキータームになりつつあるとされる。「貧困」という用語をタイトルにした著作が、矢継ぎ早に出版されている（『週刊ダイヤモンド』2009年3月21日号: 40）。

な労働者住宅地帯に引越しをした。ここは、工場街に近く、通勤にも便利である。具体的には、移民の第2世代の居住地（Second Immigrant Settlement）、ゲットーから抜け出したユダヤ人の街（Deutschland）、二階建て住宅地帯（Two Flat Area）などである。

4つ目のゾーンは、「住宅地帯」である。ここは、中流階級以上の人びとが居住する住宅街であった。都会の喧騒から離れた良好な環境の住宅地域であると同時に、「紅灯地区（bright light area）」を形成していた。それは、高級な繁華街を意味していた。その他には、高級賃貸マンション地域（Apartment Houses）、階級的・人種的に差別化された高級住宅地（Restricted Residential District）、家族用一戸建て住宅（Single Family Dwellings）などがあった。

5つ目のゾーンは、「通勤者地帯」である。さらに裕福な人びとが住んでいた地区である。経済的に成功した人々が住む「郊外」地区であり、都心部には自動車で30分から60分かけて通勤する位置にあった。バンガロー地区（Bungalow Section）がそれである。

この同心円地帯理論の特徴の一つは、円周の外側に行けば階層構造が高くなるところにあり、また、人びとは自分たちの経済状況が良好となるにつれて、なるべく外側のゾーンに引っ越そうとしていた。そのため、同心円構造そのものが拡大していく形態にあった。

このようなプロセスを経て、マクロレベルでは、社会的・階層分化、すなわち格差が広がっていく。では、これらの格差は、どのようにして表現されるのであろうか。ひとつには、「グラジエント」のテクニックで、格差が量的に表現される。同心円地帯のモデルで言えば、土地の中心から遠ざかれば遠ざかるほど、ある要素はだんだんと減ったり、逆に別の要素は、だんだんと増えたりする。それが、質的な方法（≡参与観察法・非構造化インタビュー法）で、からみ合わせ（entanglement）、三角測量（triangulation）される。すでに論じたように（西川 2008b）、生態学的過程で描かれる量的な格差は、質的な方法によって、絡み合わされ、初期シカゴ学派のバージェスらによる総合的社会認識が実践されるのである。

量的な把握だけでは、適切な社会認識ができないという立場は、現在のグローバル化の理論と一致している。初期シカゴ学派の社会認識は、さまざまな社会事象が複雑に絡み合った社会過程を単純化して把握する傾向にあり、現在のグローバル化の理論は、現象を複雑なものとしてとらえる傾向はあるが、単純な量的把握のみに終始する方法論を拒絶するという立場は一致している。

#### 5.4 福祉国家

福祉国家論は、グローバル化社会の貧困層を救う人道的立場などをはじめ、グローバル化に関するさまざまな角度から論じられている。グローバル化が福祉国家を、飲み込み、衰退させるか、それとも逆に国際競争力を高めて、発展させるかは、いずれの立場からも研究がなされている（西川・大空・姫岡・夏編 2003: 241）。

シカゴ学派の福祉実践の文脈でしばしば指摘されるのは、J・アダムズによるハルハウスのセツルメント運動であろう。だが、その後、パークらの「科学としての社会学」の時代の到来とともに、シカゴ

学派の福祉実践は陰を潜めたのだと言われている。

しかし、その後のシカゴ学派に、社会福祉の考え方が存在しなくなったというのは正しくない。パーク流の「啓発モデル」ではなく「社会工学モデル」の立場に立っていたとされるバージェスは、社会学者の手による社会政策のあり方を考えていた (Janowitz 1972)。バージェスは、社会政策の議論のなかで、その立場を社会改良から社会計画、そして社会福祉へと展開させた (西川 2007b; Burgess 1916, 1925, 1927, 1935, 1945a, 1945b, 1950, 1954, 1955a, 1955b, 1957, 1960a, 1960b, 1960c)。

初期のバージェスは、当時のシカゴ大学社会学科の雰囲気のもとで、社会改良に熱心であった。その後、シカゴ大学社会学科は、パークの影響下で、科学性を強調した社会学が推進されていくが、バージェスは社会学からの改革志向を持ち続けたのである。

バージェスの社会改革における、社会改良、社会計画、社会福祉志向への展開過程から認められるのは、社会学的社会政策史上の意義である (西川 2007b)。社会政策論上は、現在のあらゆる「社会政策・社会計画・福祉国家」(武川 2003: 210) の諸問題の萌芽が認められるのである。このことは、バージェスの社会政策論の展開過程から導き出される。すでに別で論じたことではあるが (西川 2007b)、現在の福祉社会論を参照しながら、もう少しこの側面について考察しておきたい。

いわば初期バージェスから中期バージェスへの、社会改良から社会計画の展開から見えてくるものは、パークでなくてバージェスが志向した「科学としての社会学」の推進である。「社会計画」の用語は、科学性を強調した表現であるとも現在言われているように (武川 2003: 219)、バージェスも、「社会改良」の時代以上に、社会学が基盤とする科学に特別な思いを込めていた。第一世代のシカゴ学派は、社会改良主義と深い結びつきをもった実践社会学が推進された。その後、第二世代のパークやバージェスが指導教員として力を持った時代には、改良主義ではなく「科学」が前面に押し出された。1930年代の社会計画は、この時代背景を受けて、科学的な計画論とは何かを検討された。当時、ルイス・ワースによって米国の社会学界に紹介されていたマンハイムが「社会計画」の用語に社会批判の思いを込めていたように、バージェスも「社会計画」の用語に、「科学としての社会学」の熱い思いを込めていたように思われる。後年ではあるが、バージェスの場合も、彼自身の1930年代のアメリカ人のモーレス論を裏付けるかのように「社会科学者としての社会学者は、ある<一つの価値>は、勇気を持って、力強く守り抜かなくてはならない。その一つの価値とは、思想、教育、そして調査をおこなう<自由>である」(Burgess [1954]1974: [20]313) と述べていたように、いくぶん熱い主張をおこなっていた。

バージェス社会政策論における次の段階への移行期についてはどうだろうか。いわば中期バージェスから後期バージェスへの、社会計画から老年社会学という福祉社会論への展開で見えてくるものは、先進諸国で福祉国家の形成が進んだ背後にある社会変動に関する論点である。初期シカゴ学派の社会学者たちが関心を寄せた、農村から都市へ、伝統社会から近代社会へという枠組みは、バージェスの手によって社会政策論にも生かされている。社会計画の背後には社会問題があり、社会問題の背後には、近代における社会権などの成立がある。多くの教科書の記述にもあるように、こうした議論は、自然と産業化および福祉国家の成立の議論へと導かれる。というのは、バージェスは1930年代には、19世紀の夜



警国家、つまり、社会政策上の政府の役割が限定的である計画観を持っていた。「生産者であれ消費者であれ、アメリカの大衆のなかで作られるさまざまな自発的な連合集団は、最小限の政府の監督と規制のもとではぐくまれるべきである」(Burgess[1935]1974: [15]304)。バージェスの主張する「個人主義」のモーレスにもあるように、その背景には、国家が人々の私的な生活に介入するのは望ましくないとする考え方がある。だが、同時に、バージェスも指摘するように、「人道主義」のモーレスは、「社会改革への、そしてアメリカ合衆国に社会福祉制度を作ろうとする主な動機付けとなってきた」(Burgess[1935]1974: [8]295)。しかも、バージェスの論じたもう一つのモーレス、「民主主義」の発達も福祉国家の形成を後押しする。バージェスも論じていたような公的保障制度の制定は、民主主義に基づく普通選挙制がなければ促進されなかったものと思われる。

1950年代のバージェスの老年社会学は、近代化論を背景とするものになっている。バージェスも、産業化・都市化といった近代化の諸側面が、個人や家族関係に大きな影響を与えたことを随所で強調していた。彼の社会計画論において強調されたアメリカのモーレスである「個人主義」「民主主義」「人道主義」は、それぞれの関係が矛盾を抱えながらも、福祉国家の形成に大きな影響を与えたのだと示唆しているかのようである。バージェスの社会政策論上の議論は、20世紀の「福祉国家形成の背景」と響きあっているばかりか(武川 2003: 223)、アメリカの3つのモーレスのあいだの関係を調停し、さらには「改良・計画・福祉」という、バージェスの業績上ならびに社会政策研究史上の論点を「総合」しているようにも思われる。現在を近代と断絶したものと見るにせよ、連続したものと見るにせよ、バージェスの社会政策論は、社会政策・福祉などに関して現在議論すべき論点の多くを、原初形態として示してくれているかのようである(西川 2007b)。

このように見てくると、バージェスの福祉国家論は、近代社会化論の枠組を超越していないように見える。ただし、バージェスは、福祉社会論における老年社会学の議論のなかで、社会秩序における「法的秩序」や「相互作用秩序」とは区別される「生産的秩序」とでも呼ぶべき労働社会市場から排除された高齢者たちの居場所について考察することで、いわば「親密圏」の再組織化の議論を展開していると言える(Burgess 1950, 1955a, 1957, 1960a, 1960b, 1960c)。

近代化論の老年社会学の文脈において、バージェスは、高齢者の生活の組織化に向けて、どのような政策像を描いていたのであろうか(西川 2007b)。高齢者の価値観や望みを考慮に入れた社会政策について、具体的にバージェスの考察を検討してみよう。ここには、公的制度などにかかわる「公共圏」と、家族・親戚・友人などにかかわる「親密圏」を交錯させた(社会)福祉の可能性が示唆される。バージェスによれば、高齢者の価値観や望みを考慮に入れた政策のために注目すべきは、概要として以下の9つの点であるという(Burgess 1955a: 53-7)。

第1に、仕事である。仕事の価値は、若い人と同じくらい、高齢者にとっても重要な意味を持っている。それゆえ、高齢者が続けて仕事に従事できるように、あらゆる努力がなされるべきである。とある研究結果によれば、健康状態の要因をコントロールした場合でさえも、仕事をやめた人よりも仕事を続けている人は、社会環境によりよく適応できるという。こうしたことからバージェスは、体力・エネル

ギーなどそれぞれの高齢者の条件に見合った、生活年齢にかわる新しいエイジングの基準を用いることの必要性を強調する。

第2に、レクリエーションである。退職した人びとは、仕事場にしばられることがない。そのため、可能な範囲で、自由に好きなところに住むこともできるし、旅行もできる。こうして「抑圧された欲望」や秘められた野心を表出できる。

第3は、経済的安定性である。社会の近代化とともに、資産の蓄えで生活し得たり、自分の子ども達から経済的援助を受けたりすることのできた時代は、過ぎ去ってしまった。そこで、近代社会における高齢者の収入源は、主に次の3つである。第1に、「老齡遺族保険(old-age and survivorship insurance)」などの公的な保証制度である。第2に、会社と組織がスポンサーとなる、拋出制、非拋出制の制度である。第3に、高齢者自身が、自分の子どもたちやその他親戚、友人から得られるものである。

第4に、心理学的安定である。高齢者たちは、社会のなかで自分たちの役割がなくなっていくことに不安を感じている。これは2つの方法で対処しうる。1つの方法は、「学ぶには遅し」「運動は体に毒」など、現在の間違ったステレオタイプを正そうとする教育のキャンペーンを企画することである。2つめの方法は、生産能力、社会に対して貢献できる能力があることを実際に示してみせることである。

第5は、住まいに関する安心である。退職の際、自分の家を所有する人や夫婦は、借家暮らしの人に比べて、心理学的にも、経済的にも、問題に直面することが少ない。たとえ財政上、身体上などの問題で、施設に入ることになったとしても、たとえば自分の家具を持ちこむなどして、できるかぎりあらゆる点にわたって家らしい特徴を持った雰囲気を作ることが望ましいとバージェスは言う。

第6は、家族関係である。自分の子ども、孫、ひ孫は、高齢者にとってかけがえのない存在である。ある調査によれば、異なる世代間で良好な関係を保つためには、おのおの別々に生活するが、お互いに十分な接触とコミュニケーションを維持することが重要だという。社会政策の策定にあたっては、こうした知見を考慮に入れる必要があるとバージェスは論じる。

第7に、友人である。高齢者は、何らかの理由で、友人を失うということを経験しがちである。そこで、新しい友人を作ることが、重要な問題となる。インフォーマルな社会集団やフォーマルな組織へ加入することは、この目的に沿った一つの方法である。当時、移動式共同生活住居のトレーラーハウスで生活する高齢者が増えており、注目された。

第8は、組織の一員であり続けることである。人が占める役割や地位は、部分的にせよその人が属している組織に依存している。そこで組織は、退職の年を迎えた成員に、しかるべき名目つき、あるいは無くてもよいので、名誉待遇の地位以上のものを与えるべきである。退職する人々にとって重要な位置を占めている組織に対して、予算が配分されるべきである。

第9として、新しい組織への加入がある。高齢期に感じる孤独感、寂しさ、無価値感は痛烈である。しかし、退職後は、さまざまな活動や組織に参加する時間がある。高齢者に、新しい活動や冒険の可能性を紹介するメディア、あるいは組織が求められた。

高齢者は、近代市民社会論のなかでは、生産的秩序からは逸脱した存在であるにとらえられることも

多かったのであるが、近年のグローバル化時代の福祉社会論の議論と響きあうように、バージェスは、高齢者の生活の組織化を目指して、社会学的な社会福祉論を展開した。公的制度などにかかわる「公共圏」と、家族・親戚・友人などにかかわる「親密圏」を交錯させた、多様なセーフティネットにもとづく福祉の可能性が示されている。

## 6 まとめ——シカゴ・モデルの条件と応用可能性

こうして見てくると、シカゴ学派の世界には、現代のグローバル化時代の概念がすでに登場し、豊穡に記述されているのみならず、三層構造の流動化が描かれているという意味で、グローバル化の原初形態がすでに用意されていたことが理解できる。

本報告において、まず、シカゴ学派のテキストを通じて検討してきたのは、近代家族の流動化にかんするグローバル化のキーワード、アイデンティティ、アメリカ化、居場所、ジェンダー化された「親密圏」、の各側面である。次に検討したのは、相互作用・ネットワークの流動化にかかわる、グローバル化の各側面、異文化理解、英語・言語・翻訳、消費文化、メディア、である。さらに検討したのは、国家の境界の流動化にかかわる各側面、移民、経済格差、福祉国家、である。これらの検討から浮かび上がってきたのは、初期シカゴ学派の世界は、いくつかの側面にわたって、すでにグローバル化の原初形態を用意したということである。

もちろん、現在のグローバル化のあらゆる要素が、すでに成熟した形で初期シカゴ学派の世界に認められるとは言えない。現在のグローバル化の議論は、文字通り、地球規模であり（中国語でいえば、全球的）、シカゴ学派のように一都市のみに焦点を合わせて分析したものではない。グローバルな世界都市論は、（サスキア・サッセンなど）その後の現代的シカゴ系社会学者の登場を待たねばならないが、本報告で見てきた事例は、ローカルな場で実現しているグローバルな社会現象である。

これらのグローバル化の原初形態の特質から、現代のアジア親密圏分析に学ぶことは少なくない。ただし、その実際の展開については本報告の域を超えているが、ここでいくつか方向性だけを示しておきたい。

第1は、シカゴ学派がひとつの前提とした、生活の組織化のための居場所の確保についてである。シカゴ・モノグラフにおいては、社会福祉の供給源は、イタリア系は「家族」の傾向にあり、ドイツ系は、北欧に比べれば保守的ではあるが「個人」の傾向にあるように思われる。近年、シカゴ学派社会学およびエスピノーザらに触発された調査知見によれば、米国カリフォルニア州ロサンゼルス市において、社会福祉上のネットワークがどのように構築されているかどうかに見ると、それは出身国によって異なっている。ヒスパニック系は、親族ネットワークが強く、低福祉の状態におかれても、親族に頼ることで何とか生活しようとする傾向にある。それに対して、アジア系、特に日系は、豊かな国から来たと考えられている。日系はアメリカのなかでは他国出身者に比べて識字率も高く、支援の必要もないだろう、という見方がある。したがって、日系の社会的弱者を支援する NPO、NGO などは、資

金調達に苦勞しているのだという<sup>8</sup>。だが、アジア系の社会的弱者の現状は、欧米などで一般に流布している表象とは異なる。あらゆる個人は、社会的承認を得たいという動機を有しているのは、初期シカゴ学派の社会心理学が明らかにしてきた。現在の日本の「ハウスレス」・「ホームレス」の議論が明らかにしているように、現在のアジアでは、居場所を喪失し、物理的・心理的・社会的に安定しうる空間を求める人々が、高齢者・大人・子供など、世代を問わず多く存在している。バージェスも老年社会学の議論で示唆しているように、近代社会論の文脈では、労働市場は主に、正規労働者で占められ、多くの個人も労働市場における「職」に居場所を求めていた。しかし、それが社会のグローバル化と流動化とともに、経済格差・職業格差が広がり、価値観の多様化とともに、「職」を居場所とすることができない、あるいはそもそも全く不可能な状態にある層が急増した。バージェスも論じているように、職に居場所を見出せない場合、代替する「親密圏」あるいは「公共圏」を組織化する必要がある。居場所を失っているのは、子どもだけでなく、生産年齢にある大人だけでなく、高齢者だけでもない。多くの子どもは、家庭や学校や仲間集団に自分の居場所を見出せない。多くの大人も職を失い、公共圏のみならず親密圏の生活組織化の危機を経験し、居場所の確保に尽力している。アジアの高齢者は、欧米に比して、社会的地位を確保しえているという論調もあるが (Cockerham [1991]1997: 65)、多くの高齢者も、ハウス／ホームを失い、漂流を経験している。

第2は、流動化社会におけるセーフティネットの多元性の研究である。バージェスは、流動化する社会のなかで、いわゆる社会的弱者、とりわけ「高齢者」の生活の組織化のためには、「老齡遺族保険(old-age and survivorship insurance)」などの公的な保障制度に加え、いわゆる「親密圏」における子ども・親戚などによる援助、さらには、住まいを提供する民間市場にかかわるもの、など、多様な形態を考察した。ここには、「貧困」当事者、高齢者など、いわゆる社会的弱者の資本の再組織化過程におけるセーフティネットの研究に志向される。社会福祉の供給元は、家族などの「親密圏」に加え、市場、国家などにかかわる「公共圏」もある。福祉多元主義や福祉ミックスと呼ばれる福祉の時代においては、貧困状況にある人びとは、親密圏を公共圏に求めたり、逆に公共圏を親密圏に変容させたりする。当事者たちの公共圏と親密圏の再編成の過程を、セーフティネットの多元性を勘案しながら調査をおこなう必要性について、バージェスは示唆しているように思われる。

第3に、不確定性・流動化社会における専門家集団の組織化の研究である。すでに本報告で見たように、国家の枠組が流動的なものとなり、自己も流動化し、さらには国家と自己をつなぐ中間集団モデルも有効ではない社会においては、社会の組織化のための、専門家集団の組織化も重要な側面となる。すでに見たように、初期のバージェスは、社会学的な社会調査・社会改革に熱心であった。初期のバージェスの提唱するソーシャル・サーベイ運動は、社会学者が「指揮者」あるいは「コーチ」のポジションをとりながら、社会学的な社会調査を追究し、さらには社会建設に貢献することを目指すものであった。このような社会学者のスタンスに関するバージェスの見解は、あまりにも単純であるが、しかし、異な

---

<sup>8</sup> この点に関しては大山小夜氏より、氏による米国での調査知見とあわせて教示を受けた。なお、盛田(1999)も参照した。

る専門家集団の組織化がいかにして可能かという問題設定は学ぶべきところがある。現在の社会建設にかかわる専門家と呼ばれる人びとのインセンティブの研究と、「異なる正義感」を持つそれぞれの分野の専門家たちの集約過程の研究というものが、必要である<sup>9</sup>。

これらの状況の下で、シカゴ学派のテクストをグローバル化の文脈で参照していくと、単に経済対策を講じればよいというものではなくて、人びとの生活連関の観点から、心理的・物理的・社会的な安定性をともなった生活の組織化の必要性に気付かされる。公共圏と親密圏それぞれにおける、あるいはそれぞれの境界の溶解の議論は、21世紀アジアに限ったことではない。アジア的現象・現実からの理論化を目指すためには、それまでの先人が蓄積してきた歴史的・社会学史的遺産を参照することも必要である。初期シカゴ学派の社会学者が描いた当時のシカゴの状況は、いくつかの条件に留意することで、「圧縮された近代」と称されるグローバル化時代の「アジア」的現象をとらえるうえで、参照／比較しうるものとなる可能性を有している。

## 参考文献

- Burgess, Ernest W., 1916, "The Social Survey: A Field for Constructive Service by Departments of Sociology," *American Journal of Sociology*, 21: 492-500. = Leonard S. Cottrell, Jr., Albert Hunter, and James F. Short, Jr. eds., 1974, *Ernest W. Burgess: On Community, Family, and Delinquency*, Chicago: The University of Chicago Press, 264-72.
- , [1925]1967, "The Growth of the City: An Introduction to a Research Report," Robert E. Park and Ernest W. Burgess and Roderick D. McKenzie, *The City: Suggestions for Investigation of Human Behavior in the Urban Environment*, Chicago: The University of Chicago Press, 47-62.
- (=[1965]1978, 奥田道大訳「都市の発展—調査計画序論」鈴木広編『都市化の社会学』誠信書房., =1972, 大道安次郎・倉田和四生訳『都市』鹿島出版会, 49-64.)
- , 1927, "Statistics and Case Studies as Methods of Sociological Research," *Sociology and Social Research*, 12: 103-20.= Leonard S. Cottrell, Jr., Albert Hunter, and James F. Short, Jr. eds., 1974, *Ernest W. Burgess: On Community, Family, and Delinquency*, Chicago: The University of Chicago Press, 273-87.

---

<sup>9</sup> 報告者は、いわゆる「派遣切り」や「雇い止め」などで困窮した立場にある人々への支援を志す「愛知派遣村実行委員会」の会合に出席している。実行委員会には、弁護士、司法書士、医療関係者、生活保護の支援を行っている市民団体メンバー、労働団体メンバーなどが出席し、各専門の立場から実践的な活動がとりおこなわれている。当委員会の実践的活動の一環として、2009年3月21日・22日には、愛知県岡崎市にて「反貧困・駆け込み相談会」が開催された。報告者もボランティア・スタッフの一員として参入し、相談者の付き添いと聞き取り、受け付け業務、ボランティアの指揮、会場設営などをおこないながら、種々の調査活動を兼ねておこなった。当委員会の活動への参加を通じて、報告者は、問題状況への資本の再組織化に関する調査をおこなっている。問題状況に対して、異分野の人びとを組織化して問題の解決に向かう社会過程の研究、さらには、相談員・相談者・ボランティアなど異なる背景の人が集うことで問題状況に対峙して新たなものを創発させる過程の研究を目指している。愛知派遣村実行委員会の活動、とりわけ「反貧困・駆け込み相談会」の活動内容については、すでに朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、東海テレビ、名古屋テレビ（メーテレ）、NHKなど各種メディアで報道されているとおりである。また、本相談会について、宇都宮・湯浅編（2009）にも言及がある。相談会の理念については、宇都宮・湯浅編（2008）の内容と多くを共有している。

- , [1930]1966, “Discussion,” Clifford R. Shaw, [1930]1966, *The Jack-Roller: A Delinquent Boy's Own Story*, Chicago: The University of Chicago Press. (=1998, 玉井真理子・池田寛訳『ジャック・ローラー』東洋館出版社, 293-312.)
- , 1932, “Editor's Preface,” E. F. Frazier, *The Negro Family in Chicago*, Chicago: The University of Chicago Press, ix-xii.
- , 1935, “Social Planning and the Mores,” *Publication of the American Sociological Society*, 29(3): 1-18. = Leonard S. Cottrell, Jr., Albert Hunter, and James F. Short, Jr. eds., 1974, *Ernest W. Burgess: On Community, Family, and Delinquency*, Chicago: The University of Chicago Press, 288-306.
- , 1945a, “Sociological Research Methods,” *American Journal of Sociology*, 50(6): 474-82.
- , 1945b, “Research Methods in Sociology,” Georges Gurvitch and Wilbert E. Moore ed., *Twentieth century sociology*, New York: Philosophical Library. (=1959, 内藤莞爾訳『社会学研究法』誠信書房.)
- , [1950]1980, “Personal and Social Adjustment in Old Age,” J. Douglas Brown and Clark Kerr and Edwin E. Witte, *The Aged and Society*, New York: Arno Press, 138-56.
- , 1954, “Values and Sociological Research,” *Social Problems*, 2(1): 16-20. = Leonard S. Cottrell, Jr., Albert Hunter, and James F. Short, Jr. eds., 1974, *Ernest W. Burgess: On Community, Family, and Delinquency*, Chicago: The University of Chicago Press, 307-13.
- , 1955a, “Human Aspects of Social Policy,” *Old Age in the Modern World: Report of the Third Congress of the International Association of Gerontology*, Edinburgh and London: E. S. & Livingstone Ltd, 49-58.
- , 1955b, “Our Dynamic Society and Sociological Research,” *Midwest Sociologist*, 17(1): 3-6.
- , 1957, “The Older Generation and the Family,” Wilma Donahue and Clark Tibbits, *The New Frontiers of Aging*, University of Michigan Press. Ch. 12. = Bogue J. Donald ed., 1974, *The Basic Writings of Ernest W. Burgess*, Community and Family Study Center, University of Chicago, 338-45.
- , 1960a, “Aging in western Culture,” Burgess Ernest Watson ed., 1960, *Aging in Western Societies*, Chicago: The University of Chicago Press, 3-28. (=1975, 森幹郎訳『西欧諸国における老人問題』社会保険出版社, 19-60.)
- , 1960b, “Family Structure and Relationships,” Burgess Ernest Watson ed., 1960, *Aging in Western Societies*, Chicago: The University of Chicago Press, 271-98. (=1975, 森幹郎訳『西欧諸国における老人問題』社会保険出版社, 450-501.)
- , 1960c, “Résumé and Implications,” Burgess Ernest Watson ed., 1960, *Aging in Western Societies*, Chicago: The University of Chicago Press, pp.377-388 (ISBN 0-22608-053-6). (=

- 1975, 森幹郎訳『西欧諸国における老人問題』社会保険出版社, 635-58.)
- Burgess Ernest Watson ed., 1960, *Aging in Western Society*, Chicago: The University of Chicago. (= 1975, 森幹郎訳『西欧諸国における老人問題』社会保険出版社.)
- Burgess, Ernest Watsons. Papers, Special Collections Research Center, University of Chicago Library, 1100 East 57th Street, Chicago, IL 60637.
- Burgess, Ernest Watsons. Papers Addenda, Special Collections Research Center, University of Chicago Library, 1100 East 57th Street, Chicago, IL 60637.
- Burgess, Ernest W. and Donald J. Bogue eds., 1964, *Contributions to Urban Sociology*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Burgess, Ernest W. and Joseph D. Lohman and Clifford R. Shaw, [1937]1974, "The Chicago Area Project," *Yearbook of the National Probation Association: Coping With Crime* 31: 8-28 = Bogue J. Donald ed., 1974, *The Basic Writings of Ernest W. Burgess*, Community and Family Study Center, University of Chicago, 81-89.
- Cockerham, William C., [1991]1997, *This Aging Society*, Englewood Cliffs, N.J.: Prentice Hall.
- Cressey, Paul Goalby, 1932, *The Taxi-Dance Hall: A Sociological Study in Commercialized Recreation and City Life*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Frazier, Edward Franklin, 1931, "The Negro Family in Chicago," A Dissertation Submitted to the Graduate Faculty in Candidacy for the Degree of Doctor of Philosophy, Department of Sociology, University of Chicago.
- , 1932, *The Negro Family in Chicago*, Chicago: The University of Chicago Press.
- , 1937, "Negro Harlem: an Ecological Study," *American Journal of Sociology*, 43 (July): 72-88.
- , 1939, *The Negro Family in the United States*, Chicago: The University of Chicago Press.
- , 1963, *The Negro Church in America*, New York: Schocken Books. (=1972, 溝淵寛水訳『アメリカの黒人教会』未来社.)
- , 1965, *Race and Culture Contacts in the Modern World*, Boston: Beacon Press.
- , 1968, "The Negro Family in Chicago 1964," Frazier, Edward, Franklin edited and with an introduction by G. Franklin Edwards, 1968, *On Race Relations: Selected Writings*, Chicago: The University of Chicago Press, 119-41.
- 藤澤三佳, 1997, 「社会と個人——その解体と組織化」宝月誠・中野正大編『シカゴ社会学の研究』恒星社厚生閣, 133-70.
- Held, David ed., 2000, *A Globalizing World?: Culture, Economics, Politics*, London: Routledge. (= 2002, 中谷義和監訳, 『グローバル化とは何か——文化・経済・政治——』法律文化社.)
- Hirschi, Travis, 1969, *Causes of Delinquency*, Berkeley: University of California Press. (=1995, 森田洋司・清水新二監訳, 『非行の原因』文化書房博文社.)

- 宝月誠, 2004, 『逸脱とコントロールの社会学』 有斐閣.
- Howard, Ronald, L., 1981, *A Social History of American Family Sociology, 1865-1940*, Greenwood Press. (=1982, 森岡清美監訳・矢野和江訳『アメリカ家族研究の社会史』 垣内出版.)
- Humphreys, Laud, 1975, *Tearoom Trade: Impersonal Sex in Public Place*, New York: Aldine de Gruyter.
- Janowitz, Morris, 1972, "Professionalization of Sociology," *American Journal of Sociology*, 78(1): 105-35.
- Kaplan, H. B., 1975, *Self-Attitudes and Deviant Behavior*, Pacific Palisades, California: Goodyear.
- Marx, Gary. T., 1967a, "The White Negro and the Negro White," *Phylon*, 28(2): 168-77. (<http://web.mit.edu/gtmarx/www/whitenegro.html> 2004年8月25日閲覧)
- May, Tim, 2001, *Social Research: Issues, Methods and Process, 3rd ed.*, Buckingham: Open University Press. (=2005, 中野正大監訳・高山龍太郎・鎌田大資・大山小夜・西川知亨・丹羽結花訳『社会調査の考え方——論点と方法』 世界思想社.)
- Meyrowitz, Joshua, 1985, *No Sense of Place: the Impact of Electronic Media on Social Behavior*, New York: Oxford University Press.
- 盛田茂, 1999, 『ロサンゼルスで暮らす』 中央経済社.
- 中野正大・西川知亨, 2002・2003, 「シカゴ学派におけるエスニシティ研究 (上・下) ——E・フランクリン・フレイジア『シカゴの黒人家族』」『人文』50・51, 13-51・117-74.
- 中野正大・寺岡伸悟, 1994・1995・1996, 「初期シカゴ社会学の調査方法論 (上・中・下) ——ポール・G・クレッシー『タクシー・ダンスホール』」『人文』42・43・44: 1-26, 17-47, 1-19.
- 西川長夫・大空博・姫岡とし子・夏剛編, 2003, 『グローバル化を読み解く 88のキーワード』 平凡社.
- 西川知亨, 2002, 「E. F. フレイジアの逸脱論」『京都社会学年報』10, 京都大学文学部社会学研究室, 167-87.
- , 2003a, 「初期シカゴ学派とE・F・フレイジア——人間生態学的方法の「極相」と「萌芽」」『ソシオロジ』48 (2), 社会学研究会, 91-107.
- , 2003b, 「フレイジア『シカゴの黒人家族』(一九三二)」中野正大・宝月誠編『シカゴ学派の社会学』世界思想社, 135-42.
- , 2003c, 「初期シカゴ学派と人間生態学」中野正大・宝月誠編『シカゴ学派の社会学』世界思想社, 263-4.
- , 2004, 「社会調査と人間生態学的方法——初期シカゴ学派におけるE・F・フレイジアを中心に」『社会学史研究』26, 日本社会学史学会, 129-43.
- , 2007a, 「E・W・バージェスと社会調査——「科学」の意味に注目して」『社会学史研究』29, 日本社会学史学会, 87-100.
- , 2007b, 「E・W・バージェスの社会政策論——社会改良・計画・福祉の展開」『現代社会研究』



- 10, 京都女子大学現代社会学部, 105-17.
- , 2008a, 「E・W・バージェスの「人間」概念の社会性」『金城学院大学論集』(社会科学編) 4 (1), 金城学院大学, 54-69.
- , 2008b, 「初期シカゴ学派の人間生態学とその方法——E・W・バージェスと E・F・フレイジアを中心にして」京都大学博士学位(文学)論文.
- Park, Robert Ezra, 1917, “Preface,” Jesse Frederick Steiner, *The Japanese Invasion: A Study in the Psychology of Inter-Racial Contacts*, A. C. McClurg. (=2006, 森岡清美訳『人種接触の社会心理学——日本人移民をめぐる』ハーベスト社, 3-12.)
- , 1972, *The Crowd and the Public and Other Essays*, edited by H. Elsner, translated by C. Elsner, Chicago: The University of Chicago Press.
- Persons, Stow, 1987, *Ethnic Studies at Chicago 1905-45*, Urbana: University of Illinois Press.
- 武川正吾, 2003, 「社会政策・社会計画・福祉国家」福祉士養成講座編集委員会編『新版 社会福祉士養成講座 11 社会学 第2版』中央法規, 210-25.
- 寺岡伸悟, 1997, 「タクシー・ダンスホールの魅力——ポール・G・クレッシー『タクシー・ダンスホール』」宝月誠・中野正大編『シカゴ社会学の研究——初期モノグラフを読む——』恒星社厚生閣, 407-33.
- , 2003, 「クレッシー『タクシー・ダンスホール』(一九三二)」中野正大・宝月誠編『シカゴ学派の社会学』世界思想社, 153-60.
- Thomas, William I., [1923] 1969, *The Unadjusted Girl: With Cases and Standpoint for Behavior Analysis*, Boston: Little, Brown.
- Thomas, William I. and Florian Znaniecki, [1918-20] 1974, *The Polish Peasant in Europe and America*, Octagon Books. (=1983, 桜井厚部分訳『生活史の社会学』御茶の水書房.)
- 宇都宮健児・湯浅誠編, 2008, 『反貧困の学校』明石書店.
- , 2009, 『派遣村——何が問われているのか』岩波書店.
- 吉田竜司・寺岡伸悟, 1997, 「シカゴ学派のマニフェストーロバート・E・パーク、アーネスト・W・バージェス『科学としての社会学入門』」宝月誠・中野正大編『シカゴ社会学の研究』恒星社厚生閣, 95-130.
- Zorbaugh, Harvey W., 1929, *The Gold Coast and the Slum: A Sociological Study of Chicago's Near North Side*, Chicago: University of Chicago Press. (=1997, 吉原直樹・桑原司・奥田憲昭・高橋早苗訳『ゴールド・コーストとスラム』ハーベスト社.)

2008 年度次世代研究「シカゴ学派都市社会学のアジア『親密圏』分析への応用可能性」  
(研究代表：西川知亨) による成果である。

【メンバー】 () 内は 2008 年度プロジェクト時点

西川知亨 (京都大学高等教育研究開発推進センター 研修員)